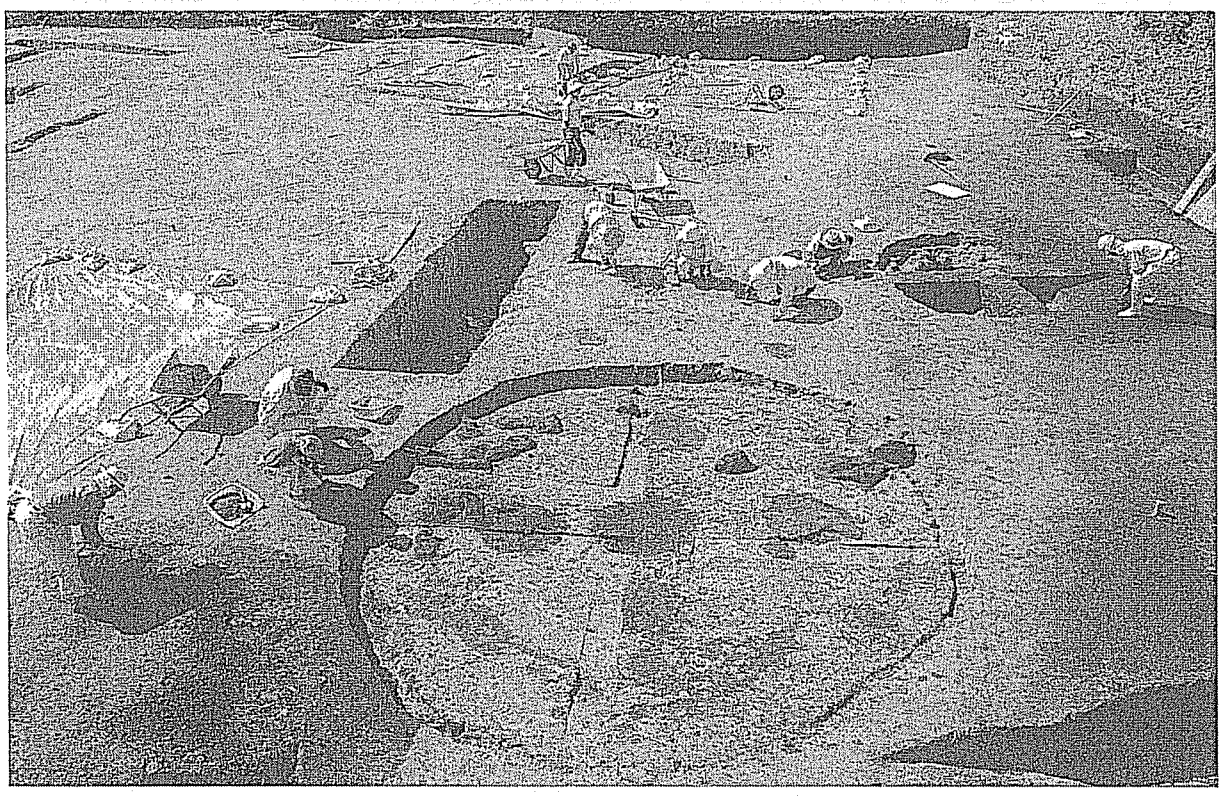
庄原市口和町大月所在

番久遺跡・原畑遺跡

見学会資料



平成２０（２００８）年１１月８日（土）　１３：００～

財団法人　広島県教育事業団

庄原市教育委員会

1　はじめに

財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室では，庄原市口和町大月に所在する，番久遺跡及び原畑遺跡の発掘調査を行っています。

この発掘調査は，中国横断自動車道尾道松江線の建設事業に伴い，平成20年7月下旬に開始したものです。調査の進展に伴って遺跡の概要が明らかになってきたので，庄原市教育委員会と共催で，現地見学会を開催することにしました。

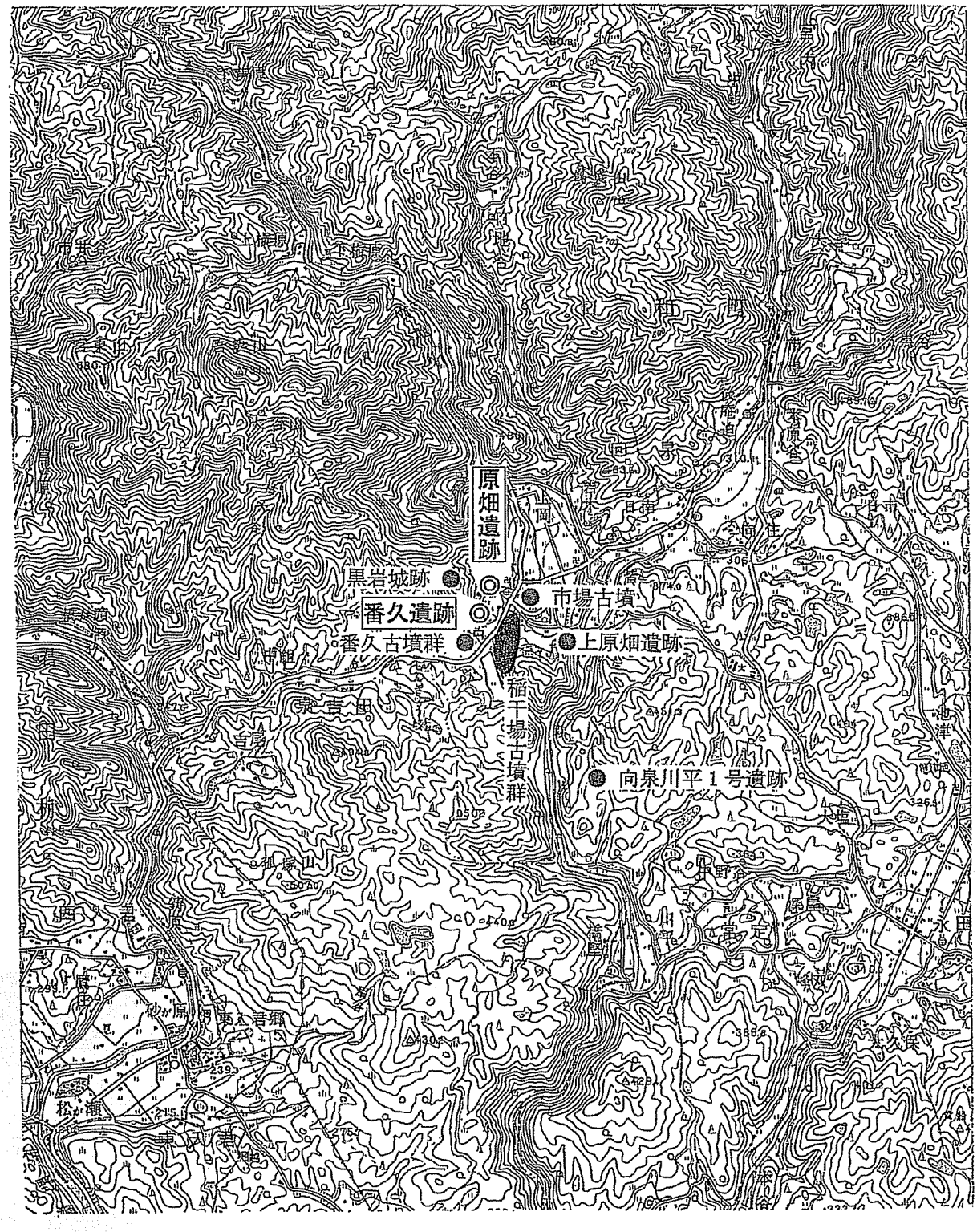
2　遺跡の立地と周辺の遺跡

番久遺跡・原畑遺跡は，庄原市口和町域の西端に位置する，古墳時代の前～中期を中心とする時期の集落跡です。遺跡は丘陵の尾根上にあり，正面東側には大月・向泉等の集落が立地する盆地がひらけています。この盆地の北側は次第に山が険しくなりますが，竹地川・宮内川沿いを北上すると高野町方面に行くことができます（県道三次高野線・新市三次線）。これらのルートがいつから利用されていたかは分かりませんが，沿線にはいくつかの山城跡が確認されており，少なくとも中世にはこの地域の重要な交通路として認識されていたと推察されます。

また，当遺跡の東方向にも，険しい山や谷が比較的少ないため，比較的簡単に移動することができたと推察されます（例：現在の県道庄原作木線）。南側は現在大きな道路はありませんが，ほぼ真南に萩川が流下するほか，西側の「しんぎょう峠」を越えて神野瀬川・西城川沿いに南下すると，君田町や三次市中心部に出ることができます（県道三次高野線）。

つまり，本遺跡は可耕地になり得る盆地や，野生動植物の狩猟・採集が可能な山岳地・河川に囲まれているうえ，交通の要衝に立地しているとみることができます。

周囲の遺跡に目を転じると，古墳が集中していることが注目されます（稲干場古墳群：13基，番久古墳群：5基，市場古墳）。時期の判明していない古墳が多いながら，一定規模の古墳が多数つくられていたことは，当地域の経済力を示す指標といえそうです。



第１図　番久遺跡・原畑遺跡と周辺の主な遺跡（1:50,000）

3　遺跡の概要

（1）番久遺跡

古墳時代前～中期（およそ 1,500～1,700 年前）のものと推定される竪穴住居跡４軒，縄文時代に野生動物を捕らえるために掘られた落し穴と推定される穴５基のほか，時期不明の墓と推定される穴などが見つかりました。

ア　竪穴住居跡

いずれも，平面形は四角形です。原畑遺跡の住居跡と同様，はっきりした柱の跡が残らないものが多く，床にクロボク（地表面近くの黒色土）と火山灰の混ざった土を敷き固めてあるのが特徴です。出土した土器の形態から，古墳時代前～中期につくられたものと推定しています。

イ　落し穴

平面形は径 1m 強の円形あるいは楕円形です。深さは 0.8～1m 程度あり，垂直に近い急角度で掘り込まれています。土層観察の結果から，これらの穴は，比較的長い間に，少しずつ周囲から土が流れ込んで埋まったと推測されます。尾根筋の傾斜が急になる部分の傾斜変換線沿いに，尾根を横断するように並んでいます。

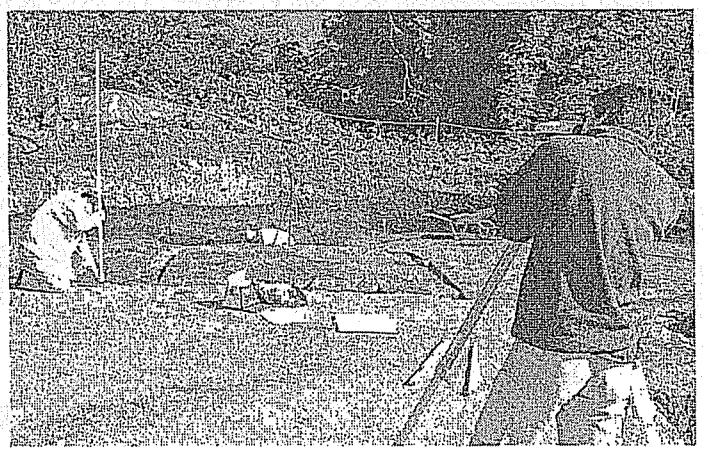
遺物は伴っていませんが，穴の形態・埋まり方・立地などから，縄文時代に全国的にみられる，野生動物を捕らえるための落し穴と推定しています。

ウ　出土品

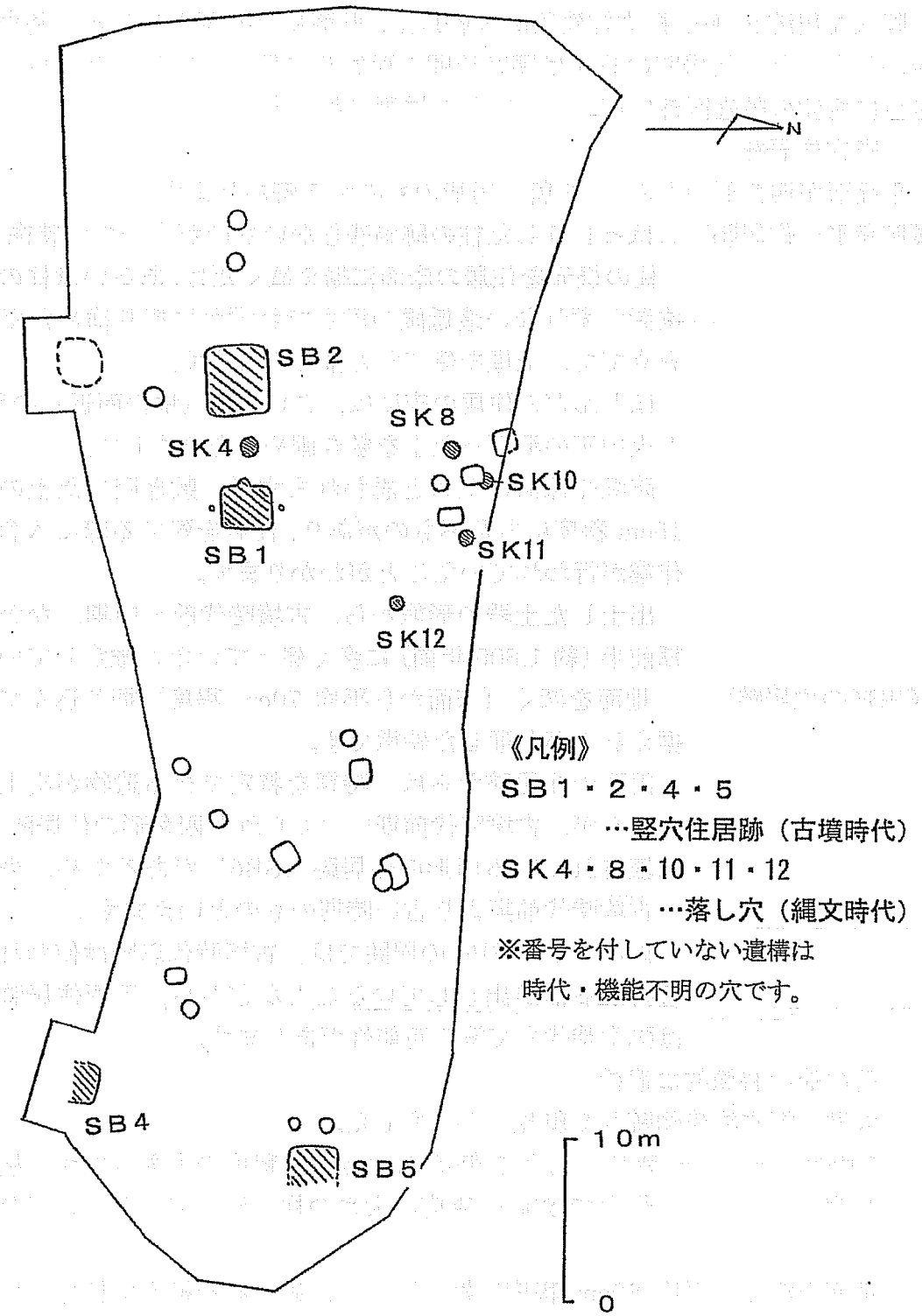
住居跡の内部やその周辺から，土器や台石などの遺物が出土しています。

《土　器》　ほとんどが古墳時代前～中期の土師器（はじき）（素焼きの土器）です。大半は煮炊きに使われた甕（かめ）などの日用品と推測されます。

《台　石》　竪穴住居跡（SB1）で，径 40cm 程度，厚さ 10cm 程度の扁平な円礫が出土しています。作業台として使用されたものと推定されます。



《発掘調査の主な作業》
発掘(左)と記録(上)を行っています



第2図　番久遺跡　遺構配置略図（1:400）

（２）原畑遺跡

古墳時代前～中期（およそ1,500～1,700年前）を中心とする時期の集落跡です。

竪穴住居跡20軒，掘立柱建物跡3軒以上，貯蔵用と推測される穴1基などが見つかりました。住居跡の分布は調査範囲の西寄りに偏っていることから，集落はさらに西側の調査区外に広がっていたと推測されます。

ア　竪穴住居跡

平面形が四角形のものが13軒，円形のものが7軒あります。

《四角形の住居跡》　はっきりした柱の跡が残らないものが多いのが特徴です。

柱の根元を住居の床面に据え置くだけ，あるいは柱の根元の位置がずれない最低限の深さでわずかに掘り窪めただけで柱を立てて，上屋を建てたと推測されます。

ほとんどの住居の床には，クロボク（地表面近くの黒色土）と火山灰の混ざった土を敷き固めてありました。

防湿や保温のためと思われますが，敷き固めた土の厚さが15cm程度にも及ぶものがあり，住居を建てる際に入念な準備作業が行われていたことがわかります。

出土した土器の形態から，古墳時代前～中期，なかでも中期前半（約1,600年前）に多く建っていたと推定しています。

《円形の住居跡》　地面を深く（床面から平均70cm程度）掘り込んで，柱を据えるのが共通した特徴です。

円形の住居跡からは，時期を特定できる遺物が出土していませんが，古墳時代前期につくられた四角形の住居跡（SB9）に壊されている円形の住居跡（SB6）があるため，少なくとも古墳時代前期より古い時期のものといえます。

また，このSB6の周囲では，古墳時代以降は使われなくなる打製石器が出土していることなどから，円形住居跡の年代は弥生時代まで遡る可能性があります。

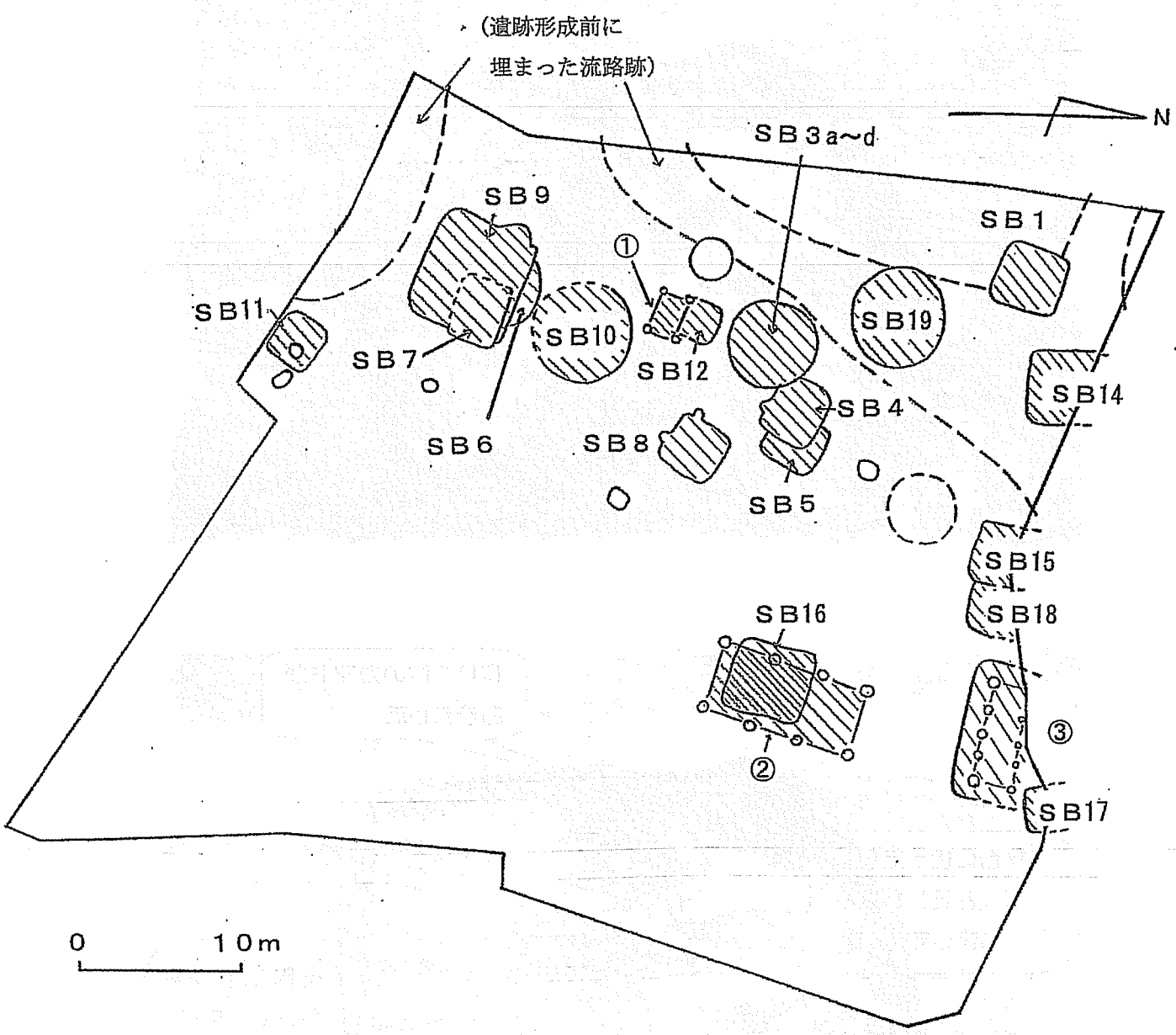
イ　その他の特徴的な遺構

大型の**掘立柱建物跡**が2軒見つかりました。

1軒は10m×4m程度，もう1軒は7m×2.5m程度の大きさです。柱穴の土層観察の結果から，最大で20cm程度の太さの柱を使っていたことが分かりました。

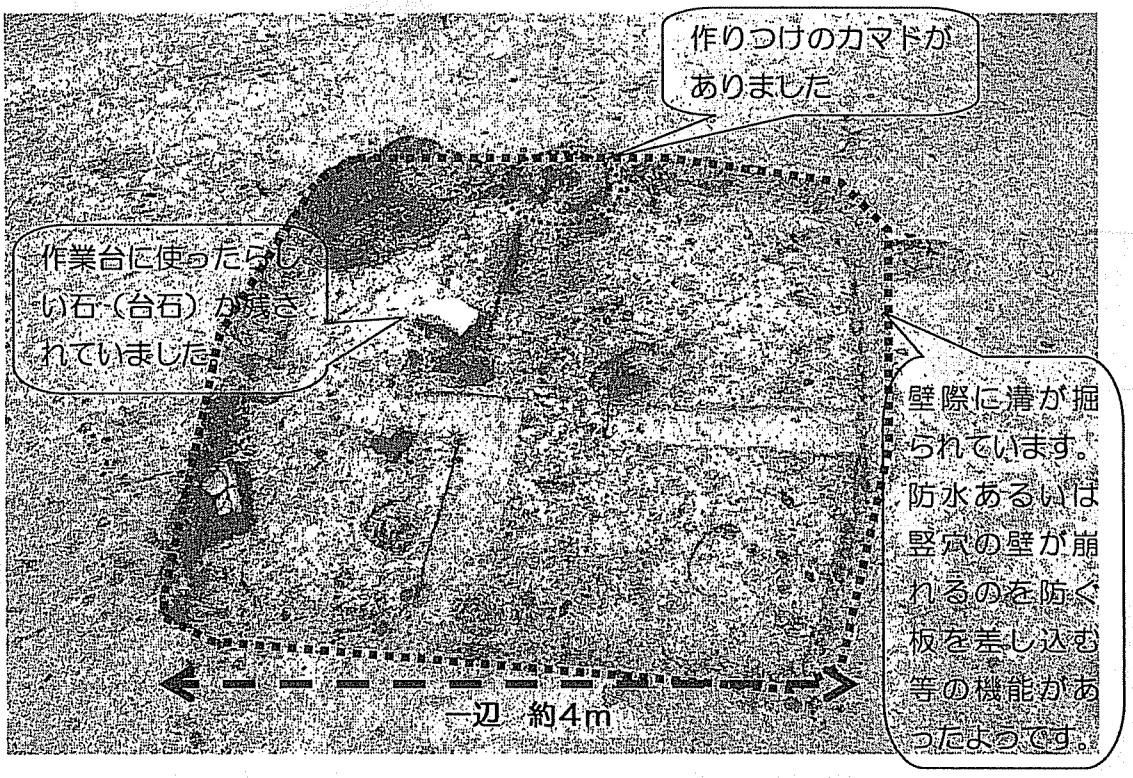
地面を深く（平均80cm程度）掘り込んで，底に石を据えて柱を立てるなどの工夫がなされており，柱に相当な荷重がかかるような大きな上屋があったことが想像されます。

建物跡に伴う遺物は少なく，今のところ時期は特定できていません。

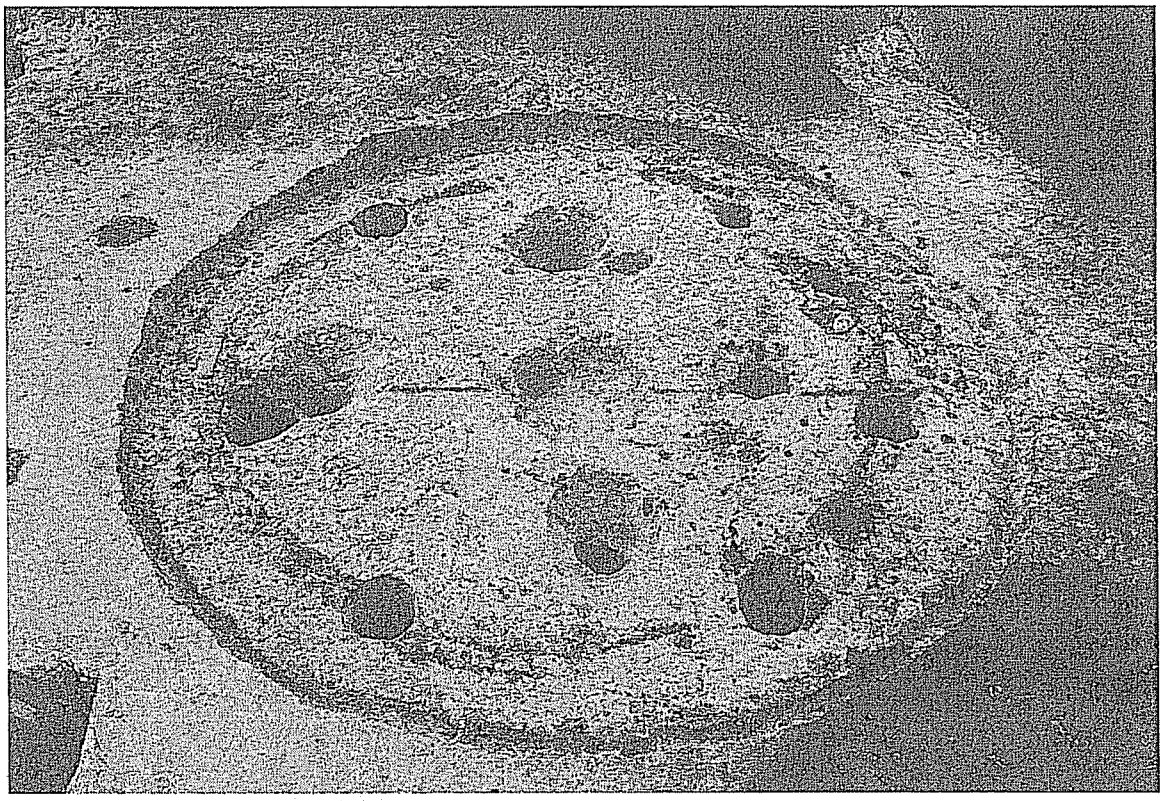


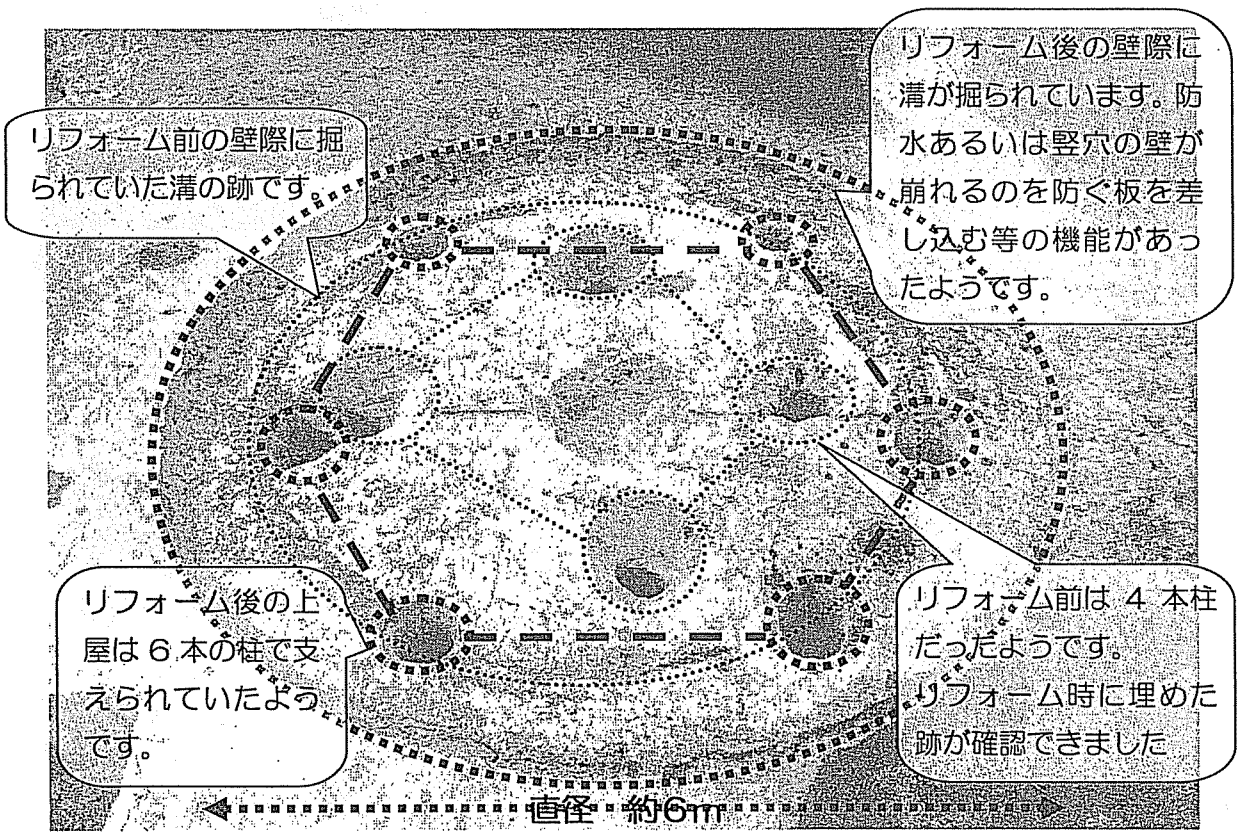
《凡例》
SB　…竪穴住居跡（弥生時代～古墳時代）
①～③…掘立柱建物跡（時期未確定）
※番号を付していない遺構は
　時代・機能不明の穴です。

第3図　原畑遺跡　遺構配置略図（1:400）



四角形の竪穴住居跡（ＳＢ８，南側から撮影）





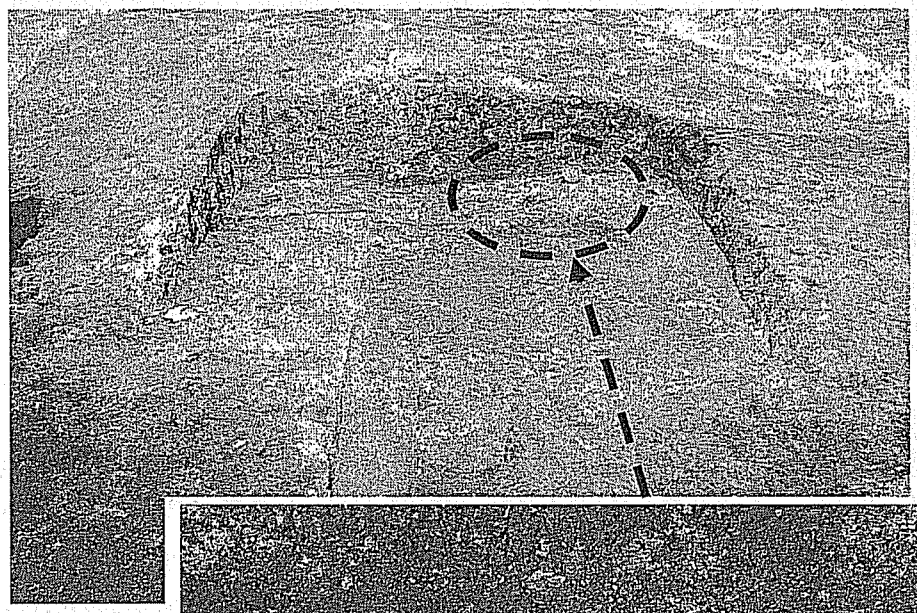
円形の竪穴住居跡（ＳＢ３，東側から撮影）

ウ　出土品

住居跡の内部やその周辺から，土器や鉄製品，砥石，台石，石製模造品などの遺物が出土しています。

《土　器》　ほとんどが古墳時代前～中期の土師器（はじき）（素焼きの土器）です。煮炊きに使われた甕（かめ）や，食べ物などを盛る高杯（たかつき）が目立ちます。

竪穴住居跡SB1とSB11では，ほぼ完全な形の高杯2個体ずつが，床面上に置かれた状態で出土しました。住居の廃絶(引越し)の際に，何かを高杯に入れて供える等の祭祀が行われた可能性があります。



竪穴住居跡

ＳＢ11　高杯出土状況（南から撮影）

《鉄製品と砥石》　鉄製品は，刀子（とうす），鉋（やりがんな）などが出土しています。

いずれも，ものを削る等の用途に用いられた工具と推定されます。

砥石は，竪穴住居跡 SB3 から出土しました。石のきめは細かく，砥ぎ減りの結果，角柱状になっています。表面には鋭い研ぎ跡が残っており，鉄製の刃物を研いだと推定されます。

《台　石》　いくつかの竪穴住居跡（SB3・8・16）では，径 40cm 程度，厚さ 10cm 程度の扁平な円礫が出土しています。番久遺跡と同様作業台として使用されたものと推定されます。

《石製模造品》竪穴住居跡が集中する範囲から東に少し外れたあたりで，長さ 4.65cm，幅 1.9cm，厚さ 0.5cm の石製品が出土しました。剣を模したものと推定されます。

類似のものは，これまで広島県内で 3 例（東広島市 2 例，安芸高田市 1 例）見つかっています。発掘調査により出土した東広島市内の 2 例には，次のような共通する特徴があります。

① 一緒に出土した土器等の形態から，古墳時代中期（およそ 1,500～1,600 年前）のものと推定される。

② 集落遺跡の，住居跡のある範囲から少し外れた場所で出土する。

③ 円板形の石製品や，実用品と考えにくいミニチュアの土器などと一緒に出土していることから，祭祀に使われたと推定される。

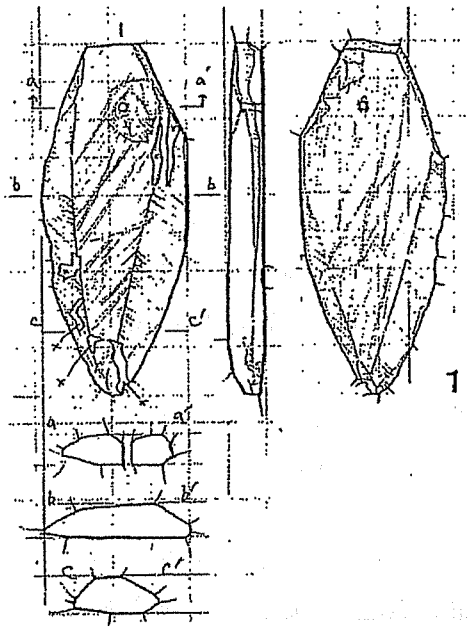
本遺跡の石製模造品は単独で出土したものですが，古墳時代中期の住居跡が密集する範囲から少し外れた場所で出土する点が共通しており，東広島市内の例と同じ時代・用途のものであった可能性が高いと思われます。

広島県内の剣形石製模造品出土遺跡

（H20. 9. 30. 時点）

遺跡名（所在地）	遺構名等	石製（滑石製）模造品の種類及び点数		その他の伴出遺物	時期（報告資料による）	文献
		玉以外	玉			
浄福寺遺跡（東広島市西条町）	B地区祭祀遺物群	剣形 1 点 不整楕円形 1 点（剣形未成品？） 有孔円板多数（単孔 5 点，双孔 6 点，ほか破片）	勾玉 2 点 小玉 1050 点（完形品概数）	土師器（手づくねミニチュア），鉄器（鏃ほか）	古墳時代中期	1
胡麻 2 号遺跡（東広島市高屋町）	第 1 土器群	剣形 1 点 不整楕円形 1 点（未成品？） 有孔円板 6 点（単孔 1 点，双孔 3 点，破片 2 点）		土師器（手づくねミニチュア，甕，高杯，椀，坩）	古墳時代中期（5 世紀後半）	2
後谷遺跡（安芸高田市高宮町）	出土状況不明	剣形 1 点		土師器（手づくねミニチュア），須恵器	古墳時代後期？	3

《引用文献》
1　東広島市教育委員会　1984『浄福寺遺跡発掘調査報告書』。
2　(財)広島県埋蔵文化財調査センター　1990『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅰ。
3　向田裕始　1974「高田郡高宮町後谷遺跡出土の祭祀遺物」『芸備』第 2 集，芸備友の会，pp. 51-55。



5cm

0

《凡例》

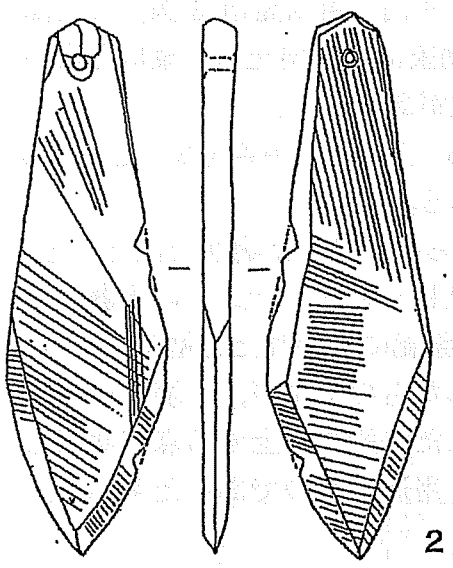
1　原畑遺跡

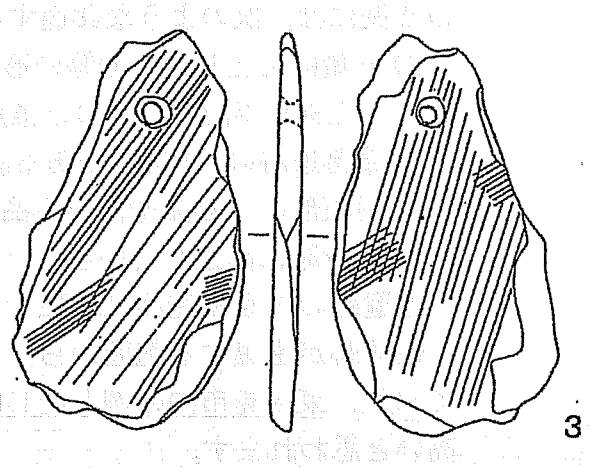
2・3　浄福寺遺跡（東広島市）

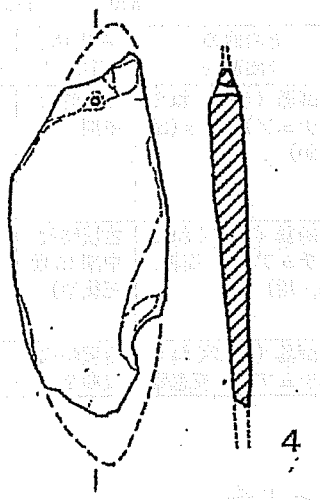
4・5　胡麻2号遺跡（東広島市）

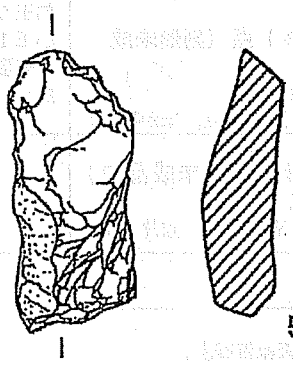
6　後谷遺跡（安芸高田市）

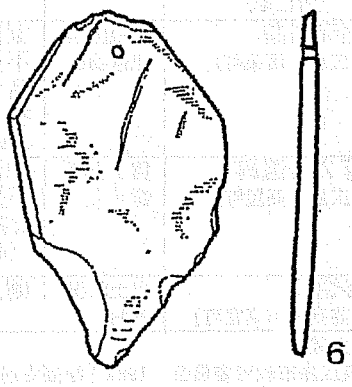
※3・5は未完成品の可能性があるもの。











第4図　広島県内の剣形石製模造品実測図

（未完成品の可能性があるものを含む。全て原寸大。各報告文献から転載）

4　まとめ

（1）古墳時代の番久・原畑遺跡

両遺跡で見つかった住居跡の多くは，古墳時代前～中期を中心とする時期のものである点が共通するうえ，両遺跡の竪穴住居跡の構造や，出土遺物の内容に大きな違いは認められないことから，両遺跡は広い意味で一つの集落を構成していた可能性が高いと思われます。調査区外の範囲も含めると，相当規模の大きい集落があり，それだけの人口を支える経済的な基盤があったことが想像されます。

周囲の遺跡に目を転じると，狭い谷を挟んだ南側・東側の丘陵上に多数の古墳がつくられていることに気付きます（稲干場古墳群：13 基，番久古墳群：5 基，市場古墳）。このうち，平成 19 年度に発掘調査が行われた稲干場第 2～4・9 号古墳は，番久・原畑遺跡とほぼ同時期の古墳です。時期の判明していない古墳も多いながら，一定規模の古墳が周囲に多数つくられていたことも，当地域の経済力を示す指標と言えそうです。

石製模造品については，剣形・円板形などの形態のものを用いた祭祀の跡が，全国各地で見つかっています。その多くは古墳時代中期のものといわれており，交通の要衝に立地する集落遺跡で多く見つかっているのが特徴です。

原畑遺跡で石製模造品が出土したことも，ここが当時の交通の要衝に位置する，この地域の中心的集落であったことを示す証拠と言えそうです。

（2）縄文時代の番久遺跡

番久遺跡で見つかった落し穴は，野生動物を捕らえるために縄文時代に掘られたものと推定されます。

民族事例等に基づく近年の研究成果では，縄文時代の落し穴は，集落の比較的近く（半径 2～5km（徒歩 1～2 時間程度）の範囲内）につくられ，パートタイムで管理されていた（ほかの仕事の合間に見回って，獲物を回収したり，掘り直し等の補修が行われた）と考えられています。

口和町内ではこれまで，上原畑遺跡（大月），向泉川平 1 号遺跡（向泉），船谷遺跡，熊谷遺跡（以上宮内），伊与谷遺跡，王子塚，一日市遺跡（以上湯木）で，縄文時代の遺跡が見つかっています。これらの遺跡と番久遺跡との直接の関係は不明ですが，少なくとも番久遺跡が縄文時代の人々の日常的な生活圏内にあった，ということは言えそうです。

《参考文献》

北武蔵古代文化研究会(編)『第 2 回東日本埋蔵文化財研究会　古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－』東日本埋蔵文化財研究会　1993 年。

佐藤宏之「陥し穴の土俗考古学」『縄文式生活構造－土俗考古学からのアプローチ』1998 年。

広島県教育委員会『広島県遺跡地図』IX（比婆郡）　2003 年。

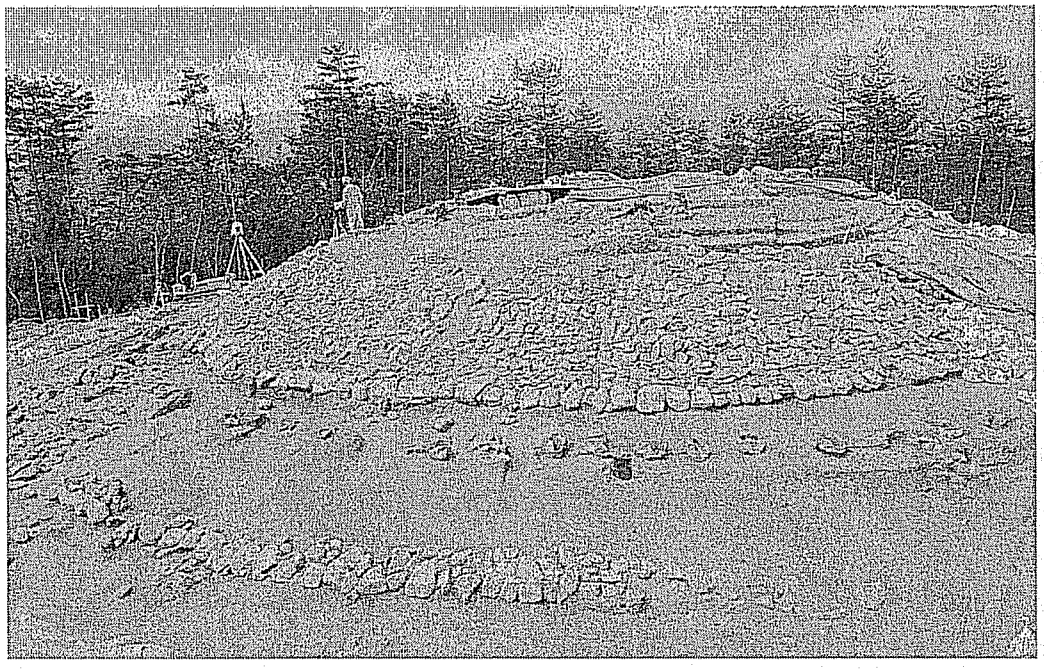
平成20年度ひろしまの遺跡を語る

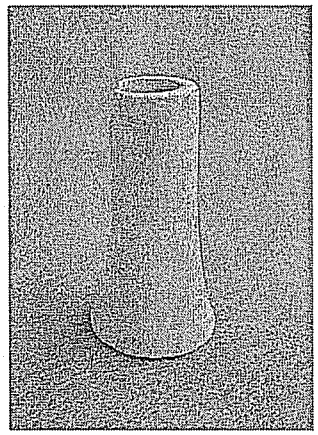
ここまでわかった広島の古墳時代

平成21年1月10日（土曜日）13時～16時40分

（開場12時30分）

広島県立生涯学習センター　（広島市東区光町1－14）





右上写真
三次市下矢井南第4号古墳
出土筒形石製品
左写真
三次市宮の本第24号古墳

テーマ「ここまでわかった広島の古墳時代」

講演「最近の調査成果からみた広島県の古墳」　広島大学大学院文学研究科教授　古瀬　清秀　氏

遺跡報告1「下矢井南第4号古墳－中国地方以西では珍しい筒形石製品－」　渡辺　昭人

遺跡報告2「宮の本第24号古墳－100本の埴輪－」　梅本　健治

遺跡報告3「岡東古墳群－高野町で初の古墳の調査－」　辻　満久

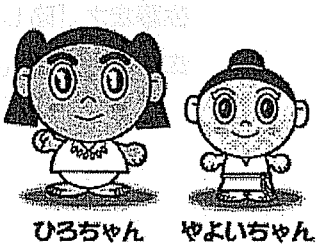
遺跡報告4「和知白鳥遺跡－古墳時代の集落－」　山田　繁樹

シンポジウム「ここまでわかった広島の古墳時代」

司会　広島大学大学院文学研究科教授　古瀬　清秀　氏

生涯学習センター内で，出土遺物と写真パネルの展示を行います

主催　財団法人広島県教育事業団

後援　広島県教育委員会　広島市教育委員会　中国新聞社　NHK広島放送局

お問い合わせ　(財)広島県教育事業団事務局 埋蔵文化財調査室　082-295-5751